

研究ノート

長島愛生園を訪れた人々ー昭和 20 年から昭和 40 年までー

People who visited National Sanatorium

Nagashima-Aiseien: from 1945 to 1965

山根 (吉長) 智恵¹⁾

Chie Yamane-Yoshinaga

キーワード：ハンセン病、隔離、言語接触、言語生活

Keywords : Hansen's disease, quarantine of the patients , language contact, language behavior

1. はじめに

日本におけるハンセン病患者⁽¹⁾は、政府が施行した 1907 (明治 40) 年の「らい予防に関する件」という法律により、療養所への収容・隔離を余儀なくされることになる。それでは、その隔離の間に療養所の外の人たちとの接触は皆無だったのであるだろうか。筆者らの研究課題である「ハンセン病療養所入所者の言語生活」は、隔離された中で生活を送ってきた入所者の言語生活を調査・分析することで、現在長島愛生園 (以下、愛生園とする)・邑久光明園の入所者への聞き取り調査を進めているが、拙稿 (2015) でも述べたように、戦前から多くの訪問者が療養所を訪れており、園外の人との言語接触が皆無だったとは言えない。

本稿では、拙稿 (2015) に続き、1945 (昭和 20) 年から 1965 (昭和 40) 年までの愛生園の患者の言語接触の様子を、主に園誌『愛生』の「愛生日誌」を分析することで考察する⁽²⁾。

2. 戦後の隔離と解放の状況⁽³⁾

1941 (昭和 16) 年、アメリカの国立カービル療養所でプロミンがハンセン病治療に初めて試みられ、その結果患者が軽快したという発表がなされた。日本でも 1946 (昭和 21)

¹⁾ 山陽学園大学総合人間学部言語文化学科

年に東京大学の石館守三教授によって初めてプロミンが科学的に合成され、東京大学の皮膚科と療養所の一つである多摩全生園で、1947（昭和 22）年には愛生園でプロミンの試験治療が試みられた。その結果、特に結節型に効果が見られ、ハンセン病は不治の病から治療可能な病へと変わっていった。1950（昭和 25）年には初めて治癒者が出、愛生園でも 1955（昭和 30）年には入園者の約半数が菌陰性となる。他の療養所でも類似の変化が見られたことから、1957（昭和 32）年、厚生省⁴⁾は菌陰性者の「らい患者退所基準」を作成し、翌年指示する。1962（昭和 37）年には「らい療養所軽快退所者等在宅療養指導要領」も各府県に通達している。

社会復帰した際に役立つようにといった更生補導も愛生園では 1956（昭和 31）年から開始され、パーマ、謄写印刷、ラジオ組立、オート三輪、洋裁、簿記、自動車の講習などが実施されるようになる。1955（昭和 30）年には岡山県立邑久高等学校校定時制課程新良田教室が開校され、高等教育が受けられるようになったことも、一般社会への復帰を後押しすることとなった。最も盛んであった 1960（昭和 35）年頃から昭和 43（1968）年頃までの間には 150 人が社会復帰している⁵⁾。

また、1958（昭和 33）年からはバスレクが始まり、無菌の者はバスに乗って島外に出ることが許されるようになった。1964（昭和 39）年には強制隔離に積極的だった鳥取県が、県出身入園者を里帰りに招待したことで、以後各県も里帰り支援を行うようになる。

このように昭和 30 年代はハンセン病患者や入所者にとって大きな転換期であった。特効薬の出現により、行動範囲が島外へと広がり、さらには一般社会への復帰も可能となったからである。

一方、特効薬の出現によっても隔離政策は継続された。1947（昭和 22）年、厚生省予防局長は、各都道府県知事宛通牒「無癩方策実施に関する件」を發し、癩の撲滅が文化国家建設途上の基本となるとし、現収容施設の最大の活用を図る方針を打ち出した。それは 1953（昭和 28）年に成立した「らい予防法」においても変わることはなかった。文言としては「都道府県知事は、らいを伝染させるおそれがある患者について、らい予防上必要があると認めるときは、当該患者又はその保護者に対し、国が設置するらい療養所に入所し、又は入所させるように勧奨することができる」と「勧奨」という言葉になっているが、それに応じないときは療養所に入所させることを命じることができる条項が明記されており、実質的には強制収容に近いものであったことが推察される。

これにより、1945（昭和 20）年には 1478 人、1946（昭和 21）年には 1299 人、1947（昭和 22）年には 1216 人と減少傾向にあった入所者数が、1948（昭和 23）年には 1380 人、1949（昭和 24）年には 1487 人、1953（昭和 28）年には 1640 人、1955（昭和 30）年には 1701 人と増加に転じ、1958（昭和 33）年には 1738 人とピークを迎えるのである。

3. 訪問者の在住地域

それでは、訪問者はどのような地域から愛生園に足を運んだのであろうか。訪問者を居住地域別にまとめたものが、以下の表 1⁶⁾である。

表1 地域別訪問者数

年	岡山	近畿	関東	四国	九・沖	中国	中部	東北	北海道	海外	その他	合計
1945-50	39	9	16	3	1	7	1			29	35	140
1951	118	33	24	13	3	18	2		1	27	66	305
1952	116	37	23	8		20	8	2		32	74	320
1953	66	29	7	3		11	4			14	31	165
1954	33	18	11	1	1	3	1			7	27	102
1955	24	9	8	1		2	1		1	4	9	59
1956	130	45	15	12	3	14	9			9	69	306
1957	92	40	15	11		11	6			14	57	246
1958	126	63	15	12	1	19	7			20	81	344
1959	101	54	17	10	4	10	6			16	96	314
1960	102	53	8	8	2	18	12			13	74	290
1961	70	34	11	10	5	10	8			12	74	234
1962	67	39	10	8	3	13	10			19	73	242
1963	123	75	27	9	12	27	13	2		26	75	389
1964	182	82	22	16	14	42	14	3	1	22	76	474
1965	149	99	36	13	13	41	13	3		27	88	482
合計	1538	719	265	138	62	266	115	10	3	291	1005	4412
注1	「九・沖」:九州の各県及び沖縄											
注2	「中国」:岡山県を除く中国4県											
注3	「海外」:海外及び国内在住の外国人											
注4	「その他」:居住地域不明											
注5	空欄は「訪問者なし」を意味し、表2も同様											

ここから、愛生園の所在地である岡山県からの訪問者が 1,538、34.9%と、全体の 3 割強を占めていることがわかる。次に他地域と比べて群を抜いて多いのが近畿地方からの訪問者で、719 で、16.3%と 2 割弱を占めている。続いて、海外 291 (6.6%)、中国地方 266 (6.0%)、関東地方 265 (6.0%)、四国地方 138 (3.1%)、中部地方 115 (2.6%)、九州地方 62 (1.4%)、東北地方 10 (0.2%)、北海道地方 3 (0.1%) である。

このように地域別に分けると、地元岡山県からの訪問者が多いことはもちろん、岡山県に近い西日本からの訪問者が多いことが見て取れる。特に近畿地方が多いのは、愛生園のある長島が岡山の東、東備地方にあり、近畿地方から来やすいことも一因であると思われる。また、関東地方からの訪問者については、療養所の管轄の厚生省、救癩団体である東楓協会⁷⁾の本部が東京にあることなども関係していると言える。中部地方については、115 のうち 64 (55.7%)、過半数以上は、無らい県運動の盛んな愛知県からの訪問者である。なお、「海外」に含まれる外国人の大半は日本国内在住で、1947 (昭和 22) 年あたりまでは軍政部⁸⁾関係が多いが、それ以降はキリスト教の宣教師が大半で、特にカトリックのロザリオ教会⁹⁾の神父が主な訪問者である。

結果、訪問者のほぼ半数が岡山県と近畿地方で占められることから、患者との言語接触があったとしても、共通語以外に耳にした方言としては、岡山方言と近畿地方の方言が大半であったと推察される。

4. 訪問者の所属機関・訪問目的

では、訪問者にはどのような職業の人が多く、また訪問目的はどのようなものであったのだろうか。本章では、訪問者の所属機関（職業）または訪問目的を、①学校（教授、教員、学生、生徒、児童など）、②宗教団体（神父、牧師、僧など）、③ハンセン病療養所・関係機関（療養所の医師・職員・入所者、藤楓協会関係者、好善社⁽¹⁰⁾関係者、日本 MTL 関係者⁽¹¹⁾など）、④官公庁職員・研究所・議員（厚生省の職員、県の衛生部・予防課職員、市長、参議院議員・衆議院議員、民生委員など）、⑤マスコミ（新聞社・放送局・出版社の社員など）、⑥短歌・俳句・川柳・詩の会（指導者など）、⑦軍（軍政部関係者など）、⑧医療機関（医師、看護師、事務職員など）、⑨皇室、⑩慰問（歌手、楽器演奏者など）、⑪その他（婦人会、青年団、スポーツチーム、囲碁・将棋指導者、職業指導者、講演会講師、画家・書家など）に分け、その数を以下の表 2 にまとめる⁽¹²⁾。

表 2 から見て取れるのは、まず、宗教関係者が 1,246、28.3%と最も多いことである。これは布教や宗教行事催行のためで、特にキリスト教関係者と仏教関係者が突出している。キリスト教のカトリックの関係者は外国人宣教師が多く、1952（昭和 27）年あたりはシップス神父、1954（昭和 29）年あたりからはウェーゼル（ベーゼル）神父、1960（昭和 35）年あたりからはスメット神父、1963（昭和 38）年あたりからはバイブル神父の名前が頻出する。プロテスタントの関係者は日本人牧師で、頻出するのは更井良夫師、河野進師、大嶋常治師である。真宗については赤松円成（赤松円城とも）師、兵庫教区の軌保政重師、1961（昭和 36）年あたりからは杉本正典師、多田慶男師の名前が見られる。真言宗については、岡田栄照師、雪上兼倍師、また 1964（昭和 39）あたりからは黒井泰然師の名前が見られる。禅宗については、岡山市の国清寺住職華山恵光師の名前がある。この他、1950（昭和 25）年からは天理教の岡山教務支庁長植田五郎師、1959（昭和 34）年からは創価学会の北正明師、1960（昭和 35）年からは仏立宗の森下日灯上人などが来園していた。1951（昭和 26）年には、臨済宗立の仏教系大学である花園大学の学長、山田無文師も訪れており、その後も重ねて訪問している⁽¹³⁾。

次に多いのは官公庁からの訪問者で、887、20.1%を占める。関係省庁の厚生省からは、厚生大臣・橋本龍伍氏を初めとして、医務局職員、技官などが訪れている。この時期は、参議院・衆議院議員の訪問も目立つ。秋山長造氏、江田三郎氏、亀山孝一氏、矢山有作氏、和田博雄氏、藤原道子氏などだが、特に社会党が多い。

また学校関係者も視察や交流などで訪れており、その数は 509、11.5%である。多いのは大学・専門学校関係者（教員・学生）で、遠方の北海道地方から来ている 3 名のうち 2 名は北海道大学の教員と学生である。岡山県下の高校生の訪問も多く、特に園に近い邑久高校、西大寺高校からは、野球・卓球・バレーボール・バドミントンなどのスポーツ交流で訪れているケースもしばしば見受けられる。山陽学園も、1950（昭和 25）年には演芸、1952（昭和 27）年にはバレー劇、1962（昭和 37）年にはバドミントンの交換試合で各 1 回訪問している。

それ以外は、360、8.2%の療養所関係者、242、5.5%の慰問関係者、199、4.5%の短歌・俳句・川柳・詩などの文芸指導者、138、3.1%の医療関係者、96、2.2%のマスコミ関係者である。その他の 701、15.9%には囲碁・将棋の指導者、画家・書家、菊花展や盆栽の指導者、歌舞伎芝居を行う愛生座⁽¹⁴⁾の指導者、写真コンテストの審査員、野球を主とした

スポーツ交流のために訪れたチームなどが含まれており、この時期、文芸指導者の訪問と合わせると、多様な活動が盛んに行われていたことが窺える。主な訪問者に俳句では阿部みどり氏、飯田蛇笏氏、森川暁水氏、梶井枯骨氏、三木朱城氏、川柳では川上三太郎氏、大森風来子氏、詩では大江満雄氏、小野十三郎氏、長瀬清子氏、藤本浩一氏、短歌では大村呉楼氏、奥谷漠氏、杉鮫太郎氏、柳原白蓮氏、小説では由起しげ子氏、写真では緑川洋一氏、囲碁では瀬川良雄氏、将棋では大山康晴氏、内藤國男氏がいる。これらの訪問者には著名人も多いが、慰問関係者についても、バイオリニストの辻久子氏、巖本真理氏、歌手の渡辺はま子氏、藤島桓夫氏、箏曲家の宮城道雄氏、オペラ歌手の藤原義江氏などの著名人の名前が見られる。

表2 所属機関・目的別訪問者数

年	学校	宗教	療養所	官公庁	マスコミ	短歌	軍	医療	皇室	慰問	その他	合計
1945-50	5	21	3	29	1	4	19	1	3	31	23	140
1951	27	58	17	48	16	18		10		40	71	305
1952	45	53	14	64	6	9	3	21	1	49	55	320
1953	11	38	7	30	9	17		5		13	35	165
1954	8	30	11	15	4	4		1	1	13	15	102
1955	2	13	9	9	1	10		1	1	5	8	59
1956	25	80	28	62	13	22		3	1	6	66	306
1957	12	84	16	46	2	23			2	8	53	246
1958	20	118	23	71	6	20		3	1	20	62	344
1959	20	122	22	68	5	17		1	1	9	49	314
1960	17	102	18	59	8	21		4		16	45	290
1961	12	84	35	38	1	7		4		10	43	234
1962	11	105	21	39	1	11		3		8	43	242
1963	84	113	33	74	8	6		30	1	6	34	389
1964	114	119	62	102	4	6		22		7	38	474
1965	96	106	41	133	11	4		29		1	61	482
合計	509	1246	360	887	96	199	22	138	12	242	701	4412

5. 1931（昭和6）年から1944（昭和19）年までの訪問者との比較

本稿の第3章、第4章では、1945（昭和20）年から1965（昭和40）年までに愛生園を訪問した者の居住地、機関・目的を見てきたが、それではそれらと山根（2015）で分析した1931（昭和6）年から1944（昭和19）年までのデータの傾向に相違は見られるのだろうか。

まず、訪問者の居住地であるが、山根（2015）のそれでは、訪問者数合計は2,701である。ここから、戦後の20年と戦前では、戦前が5年少ないこともあり、訪問者数合計が1.63倍に増えていることがわかる。また、戦前は多い順に岡山（804、29.8%）、近畿（341、12.6%）、海外（192、7.1%）、関東（185、6.9%）、四国（95、3.5%）、九州（83、3.1%）、中国（77、2.9%）、中部（62、2.3%）、東北（20、0.7%）、北海道（3、0.1%）、そしてその他（839、31.0%）であった。これと本稿のデータを比較すると、訪問者数が増加しているにもかかわらず、九州・沖縄地方と東北地方からの訪問者数は減少していることが明

らかである。さらに、割合で言えば、関東地方、四国地方も減少していることが見て取れる。つまり、岡山県内、近畿地方、中国地方、中部地方のみが訪問者数、割合共に増加しているのである。

この理由として3点が考えられる。1点目は、文化活動・スポーツ活動での交流や指導が活発に行われるようになったことである。遠方から交流・指導のために訪問するのは経費も時間もかかる。よって、岡山県内や兵庫、大阪など近畿地方からの訪問者がどうしても多くなるのである。2点目は、学生の療養所見学の増加である。中国地方の学生がハンセン病療養所を見学する場合、愛生園が最も近く、見学しやすい療養所であることが一因であると思われる。3点目としては、患者数が全国上位だったことから、戦後も無らい県運動を継続した愛知県が中部地方にあり、そこからの患者が療養所にも多く、よって愛知県からの訪問者数が多かったことが挙げられる⁽¹⁵⁾。

次に、訪問者の機関・目的であるが、山根（2015）では、多い順に宗教（699、25.9%）、官公庁（584、21.6%）、学校（269、10.0%）、療養所（266、9.9%）、慰問（193、7.1%）、マスコミ（53、2.0%）、短歌（49、1.8%）、軍（47、1.7%）、医療（39、1.4%）、そしてその他（502、18.6%）であった。これと本稿のデータを比較すると、戦後の民主化によって日本の軍人は皆無になったため、訪問者が進駐軍関係者のみとなった「軍」を除いて、いずれも訪問者数では増えているが、数、割合共に増加しているのは、学校、宗教、短歌、マスコミ、医療に止まっていることがわかる。

この主な理由として、2点が考えられる。1点目として挙げられるのは、戦後、特効薬ができたことでハンセン病への恐怖心が弱まり、ハンセン病理解の教育の場として、あるいはハンセン病治療の可能性を医療関係者が学ぶ場としての役割を果たすようになったことである。2点目として挙げられるのは、特効薬ができたといっても、少数の軽快退所者を除き、依然療養所内での生活を余儀なくされたため、戦前から行われていた俳句・川柳・短歌・詩のような文化活動に対する助言・指導に、多くの俳人・川柳家・歌人・詩人が訪れたことである。

結果、言語接触という点から見ると、上記に挙げた文化活動、そして第4章で述べた囲碁・将棋・芝居などの文化活動、さらに第2章で挙げた技術講習会（例：パーマ）の講師とは、言語を通しての交流を行ったことが推察される。よって、岡山方言と近畿地方の方言を聞く機会は十分にあったのではないだろうか。

6. まとめと今後の課題

本稿では、園誌『愛生』などを基に、1945(昭和20)年から戦後1965(昭和40)年までの訪問者と患者・入所者との言語接触の可能性について考察した。今後は、1966(昭和41)年以降の『愛生』の分析を行い、訪問者との言語接触の可能性の面から引き続き考察を行うとともに、インタビュー調査の結果を分析することで、インタビューデータと文献データの両面から、入所者の言語生活を明らかにしていきたい。

付記

本稿は、科学研究費（挑戦萌芽）「ハンセン病療養所入所者の言語生活」（26580085）の研究成果の一部である。

謝辞

本稿執筆にあたり、長島愛生園関係者には大変お世話になりました。記して御礼申し上げます。

注

(1)本稿では、基本的に、治癒していない(菌を保持している)人を「患者」、治癒した(菌を保持していない)人を「入所者」とする。また、ハンセン病は1996(平成8)年の「らい予防法廃止法案」施行以前は「らい病」と呼ばれていた。「らい」の表記に関しては、法案などでひらがな表記をしているものについてはひらがなで、漢字表記にしているものについては漢字で表記した。

(2)本稿では、1945(昭和20)年から1965(昭和40)年までの様子を分析・考察するが、1944(昭和19)年8月以降、1947(昭和22)年2月1日に復刊されるまで『愛生』は休刊となっており、また1949(昭和24)年2月までの『愛生』には高松の宮殿下来園以外に訪問者の記載が見られないため、『愛生』については、1949(昭和24)年8月号(3月来園分)から1966(昭和41)年3月号(1965(昭和40)年12月来園分)までを分析対象とした。ただし、1953(昭和28)年から1955(昭和30)年にかけては訪問者が記されていない号もある。

こういった理由から、1945(昭和20)年から1949(昭和24)年3月までの訪問者については、1958(昭和33)年の『愛生年報』、長島愛生園入園者自治会(1982)を分析対象とした。さらに『愛生』に記載されていない訪問者については、国立療養所長島愛生園(2010b)の年表を参考に、分析対象に加えた。

(3)本章については、長島愛生園入園者自治会(1982)、岡山県のハンセン病対策を振り返り正しい理解を進める委員会編(2002)、佐川・大竹・成田編著(2002)、愛知県健康福祉部健康対策課編(2004)、大阪府ハンセン病実態調査報告書(2004)、厚生労働省ハンセン病問題に関する検証会議最終報告書(2005)、藤野(2006)、岡山県ハンセン病問題関連史料調査委員会ハンセン病問題関連史料調査専門員編(2009)、国立療養所邑久光明園入所者自治会編(2009)、国立療養所長島愛生園(2010a、2010b)、園誌『愛生』などを参考にまとめた。

(4)現厚生労働省。

(5)長島愛生園入園者自治会(1982) p.168 参照。岡山県ハンセン病問題関連史料調査委員会ハンセン病問題関連史料調査専門員編(2009) p.105 には、1948(昭和23)年から1976(昭和51)年の軽快退所者(社会に復帰するために療養所を退所した人)数は男性170人、女性62人と記されている。

(6)「愛生日誌」や国立療養所長島愛生園(2010b)の年表には、「8月19日 大谷大学生3名見学」のように、日にちごとに訪問者が記されている。よって、同日に同地方から来ている場合、複数名であっても「1」と数えた。「大森風来子、軌保氏」のような場合、両名の居住地域が判明しており、それが異なる場合は、それぞれの居住地域に分けて数えたが、複数名のうち1名のみが判明している場合は、その判明している地域で数えた。「中国四国県予防課長会議」のように、在住地域が異なる者が会している場合は、「岡山」「中国地方」「四国地方」に分けて数えたが、全国会議のような場合は「その他」として数えた。また、本稿執筆段階で居住地域が判明していない者についても「その他」に含めているため、今後の調査で在住地域が判明した場合、表1の数字に変更が生じる可能性がある。

(7)1951(昭和26)年に貞明皇后が死去されたことに伴い、その遺金と民間を中心とする募金を基に設立された団体。管轄は厚生省。1952(昭和27)年6月に、高松宮先宣仁を総裁に発足し、それまでのライ

山根（吉長）：長島愛生園を訪れた人々

予防協会の事業は藤楓協会に受け継がれた。詳しくは厚生労働省ハンセン病問題に関する検証会議 最終報告書（2005）参照。

(8)終戦後の連合国軍の占領行政において、軍政グループは 5 グループに分けられた。岡山には呉を本部とする 94 グループのうち、36 軍政中隊が配置された。竹前（1983）参照。

(9)1951（昭和 26）年 1 月、プロテスタントとカトリックを 1 つにした曙教会から独立した教会。広島司教区に属したが、直接には岡山教会指導の下に運営された。長島愛生園入園者自治会（1982）参照。

(10)1877（明治 10）年、教育宣教師ヤングマン女史と 10 名の教え子によって設立されたボランティア団体。1894（明治 27）年、東京の目黒にハンセン病の私立病院を建設し 1942（昭和 17）年まで経営。1963（昭和 38）年からハンセン病国立療養所でワークキャンプを行い、入所者との交流を続けている。好善社 <http://www.kt.rim.or.jp/~kozensha/>参照。

(11)「MTL（The Mission to Lepers 救らい協会）」は、ハンセン病患者とその家族を支援するキリスト教団体のことである。

(12)大学の医学関係の教授、ハンセン病療養所・官公庁に勤務する医師・看護師が訪問している場合は、「医療機関」ではなく、「学校」「ハンセン病療養所」「官公庁」に含めている。高校生や医学部の学生などが慰問で訪れた場合は、「学校」に含めている。看護学院などの専修学校からの訪問も「学校」に含めている。職業や目的がはっきりしない訪問者は「その他」に含めている。なお、今後の調査で所属機関や目的が判明した場合、表 2 の数字に変更が生じる可能性がある。

(13) 園での宗教活動については、長島愛生園入園者自治会（1982）、国立療養所長島愛生園（2010b）参照。

(14) 長島愛生園入園者自治会（1982）参照。

(15) 愛知県健康福祉部健康対策課編（2004）参照。

参考文献・参考 URL

愛知県健康福祉部健康対策課編（2004）『ハンセン病の記録－ハンセン病と共に・偏見差別のない愛知を求めて－』愛知県

江尻美穂子（1995）『神谷美恵子 人と思想』清水書院

大阪府ハンセン病実態調査報告書（2004）

<http://www.pref.osaka.lg.jp/kenkozukuri/hansen/houkoku.html>

（2016 年 1 月 11 日閲覧）

大嶋得雄（1996）『約束の日を望みて－長島曙教会創立 65 周年記念誌－』長島曙教会

岡山県のハンセン病対策を振り返り正しい理解を進める委員会編（2002）『意見書』岡山県

岡山県ハンセン病問題関連史料調査委員会ハンセン病問題関連史料調査専門員編（2007）

『長島は語る 岡山県ハンセン病関係資料集・前編』岡山県

岡山県ハンセン病問題関連史料調査委員会ハンセン病問題関連史料調査専門員編（2009）

『長島は語る 岡山県ハンセン病関係資料集・後編』岡山県

岡山県大百科事典編集委員会企画編集（1980）『岡山県大百科事典 上巻』

岡山県大百科事典編集委員会企画編集（1980）『岡山県大百科事典 下巻』

岡山県歴史人物事典編纂委員会編（1994）『岡山県歴史人物事典』山陽新聞社

岡山日日新聞社（1986）『岡山日日新聞社創刊 40 周年記念 岡山県人名録』岡山日日新聞

社

尾崎元昭 (2015) 『隔てと島のはざままで』 文芸社

川端定三郎 (1998) 『岡山文庫 195 岡山・備前地域の寺』 日本文教出版

厚生労働省ハンセン病問題に関する検証会議 最終報告書 (2005)

<http://www.mhlw.go.jp/topics/bukyoku/kenkou/hansen/kanren/4a.html>

(2016 年 1 月 11 日閲覧)

好善社 <http://www.kt.rim.or.jp/~kozensha/> (2016 年 2 月 6 日閲覧)

国立ハンセン病資料館編 (2013) 『国立ハンセン病資料館 常設展示図録』 国立ハンセン病資料館

国立療養所長島愛生園入所者自治会編 (2009) 『邑久光明園創立百周年記念誌「隔離から解放へ」－邑久光明園入所者百年の歩み－』 山陽新聞社

国立療養所長島愛生園 (2010a) 『国立療養所長島愛生園 創立 80 周年記念誌 [第一部] 80 年を迎えて』 国立療養所長島愛生園

国立療養所長島愛生園 (2010b) 『国立療養所長島愛生園 創立 80 周年記念誌 [第二部] 振り返れば 80 年』 国立療養所長島愛生園

佐川修・大竹章・成田稔編著 (2002) 『ハンセン病資料館』 高松宮記念ハンセン病資料館運営委員会

山陽新聞社編 (1989) 『岡山県人名鑑』 山陽新聞社

竹前栄治 (1983) 『岩波新書 232 GHQ』 岩波書店

長島愛生園入園者自治会 (1982) 『隔絶の里程－長島愛生園入園者五十年史－』 日本文教出版

藤野豊 (2006) 『ハンセン病と戦後民主主義－なぜ隔離は強化されたのか－』 岩波書店

みすず書房編集部編 (2004) 『神谷美恵子の世界』 みすず書房

山根智恵 (2015) 「長島愛生園を訪れた人々－昭和 6 年から昭和 19 年まで－」 『山陽論叢』 第 21 卷

分析資料

『愛生』 愛生日誌 昭和 22 年 2 月号～昭和 41 年 3 月号

『愛生年報』 昭和 33 年年報

『国立療養所長島愛生園 創立 80 周年記念誌 [第二部] 振り返れば 80 年』 年表